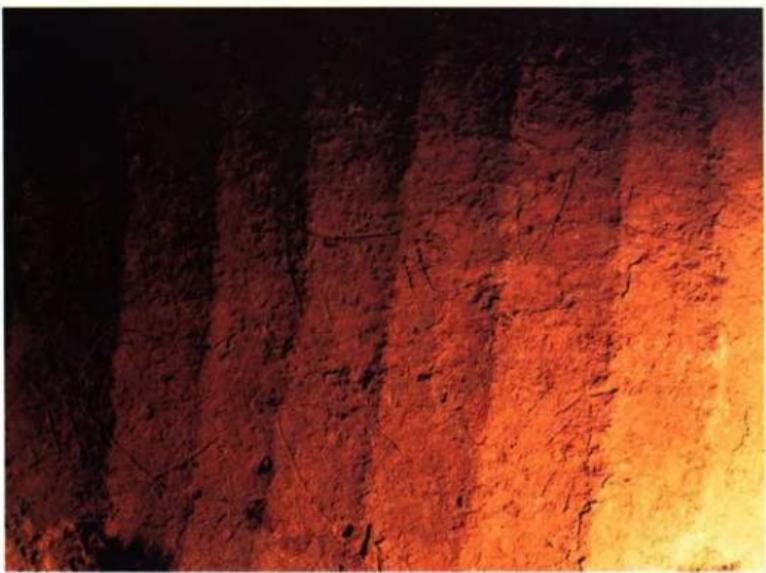


一般国道10号佐土原バイパス埋蔵
文化財発掘調査報告書

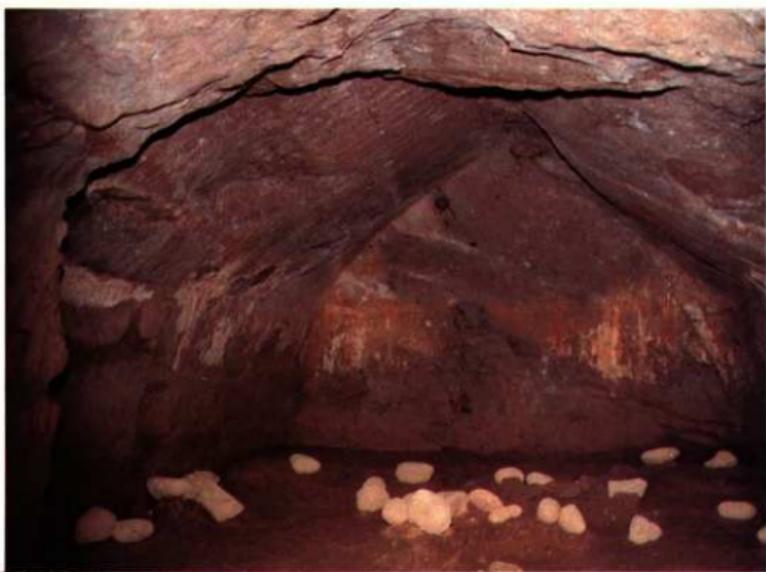
(土器田横穴古墳)

昭和56年3月

佐土原町教育委員会



壁 画



内 部 状 况

序

佐土原町教育委員会では、町内に数多く分布する埋蔵文化財を記録保存するため開発工事等が実施される場合には、文化財保護法第57条の3の規定により発掘調査を実施しています。

今回は、建設省九州地方建設局宮崎工事事務所が計画している一般国道10号佐土原バイパス予定地内に下那珂土器田横穴古墳がありこれを記録保存するため工事主体である建設省九州地方建設局宮崎工事事務所から佐土原町教育委員会が委託を受け事前発掘調査を実施しました。

この報告書は、この事前発掘調査の記録であり、学術資料として、また社会教育・学校教育の資料として広く活用していくとともに文化財保護の一助となることを願うものです。

最後に、この調査に御協力いただいた建設省九州地方建設局宮崎工事事務所・県文化課を始め地元の方々特に調査期間中御協力下さった岩切高明氏に厚く御礼を申し上げます。

昭和56年3月

佐土原町教育長 後藤典夫

例　　言

1. 本報告書は、建設省九州地方建設局宮崎工事事務所の一般国道10号佐土原バイパス建設工事に伴う事前発掘調査報告書です。
2. 発掘調査は、昭和55年11月17日から12月5日まで実施した。
3. 本稿の執筆は、調査員並びに補助調査員が分担して執筆し本文末尾に執筆者名を記した。
4. 実測については、遺構・土器については有田辰美、鉄器については山中悦雄が担当した。なお、本報告書の標高は海拔絶対高である。
5. 監修者　日高正晴

正誤表

- 5 頁 9 行 例 石 → 列 石
5 頁 20 行 1. 1 m → 2. 2 m
9 頁 6 行 12 図 21 → 12 図 22
17 行 隨 円 → 惟 円 計 る → 計 る
29 行 である 猿 → で 猿
33 行 外 傾 I → 外 傾 し
10 頁 11 行 様 量 体 → 様 体
22 行 顎 著 → 顎 著
23 行 紐にする → 紐による
26 行 4 cm 下 → 4 cm 大 壁身が・上部が → か
11 頁 2 行 資料と 資料と → 資料と
4 行 IV 様式を → IV 様式に
12 頁 21 行・22 行の間に 鑑を入れる
24 行 (図 版) → (図版10)
27 行 金 形 → 全 形
13 頁 2 行 (図 版) → (図版2)
9 行 (図 版) → (図版4)
16 行 鉄 器 → 鉄器小結
19 行 耕 具 → 工 具 するもの → すること
16 頁 12 行 諸 し かも → 諸 し かも
図 版 (写 真)
27 頁 (21) → (22)
35 頁 20 → 21

以上のとおり訂正してお詫び致します。

本文目次

第1章 発掘調査の経過	1
第2章 位置と歴史的環境	2
第3章 横穴遺構	4
1. 内部構造	4
1. 東1号横穴	4
2. 東2号横穴	5
2. 遺物	6
1. 須恵器	6
2. 土師器	10
3. 鉄器	11
4. その他の	13
第4章 壁画	14
1. 奥壁線刻画 (1) 馬	14
(2) 鳥 (3) 人物 (4) その他の形象壁画 (5) 三角文	15
2. 西側壁線刻三角文	15
第5章 結語	16

插 図 目 次

第 1 図 土器田周辺地形図	2
第 2 図 上器田横穴群東 1 ~ 2 号位置図	2
第 3 図 東 1 号横穴実測図	18
第 4 図 東 2 号横穴実測図	19
第 5 図 東 1 号遺物出土状況図	20
第 6 図 東 2 号遺物出土状況図	21
第 7 図 東 1 号奥壁線刻画実測図	22
第 8 図 東 1 号奥壁線刻画見通図	23
第 9 図 東 1 号西側壁線刻三角文見通図	24
第 10 図 須恵器実測図	25
第 11 図 土師器（砥石を含む）実測図	26
第 12 図 ヘラ記号（窯印）拓影 1	27
第 13 図 須恵器拓影 2	28
第 14 図 鉄器実測図 1	29
第 15 図 鉄器実測図 2	30

図版目次

図版1 ① 奥壁線刻 (カラー)	
② 西側壁面	
図版2 遠景及び東1号横穴内部状況	31
図版3 東1号壁画 馬、鳥の壁画	32
図版4 東2号壁画 馬、鳥の壁画	33
図版5 須恵器(坏蓋、坏身)	34
図版6 須恵器(坏身、坏蓋)	35
図版7 須恵器・土師器(坏)	36
図版8 特殊器形(高台、平瓶、長颈壺)	37
図版9 不明土器、砥石、人骨出土状況	38
図版10 東1号鉄器類(装身具を含む)	39
図版11 東2号鉄器類	40



第1章 調査に至る経緯及び組織

1. 調査に至る経緯

一般国道10号佐土原バイパスは、昭和50年11月に実施設計図が完了した。現在の国道10号線は、本町の中心市街地を縦走しており一日の交通量も約2万台更に10年後には、3万台をゆうに越える交通量が想定され、交通の渋滞が最大の難問であることから、これを打開し幹線道路としての需要に供するため計画されたものです。

しかし、当地域は下那珂土器田横穴古墳群を中心に城ヶ峰・岩穴ヶ迫等の横穴古墳群地域であることから同計画ルート承認と同時に埋蔵文化財の分布調査(昭和49年5月)が実施され、その報告書を考慮した実施設計図が完了している。

その後、昭和54年12月3日から4日の2日間再分布調査を実施したところ横穴古墳が確認された。(なお、曾我部長良著「日向の横穴」(昭和50年10月発刊)には下那珂土器田第55号古墳として紹介されている。)

以上の調査結果を基に建設省九州地方建設局宮崎工事事務所・宮崎県文化課・佐土原町教育委員会の間で当土器田横穴古墳の取扱いについて協議した結果、工事着手前に発掘調査し、記録保存の措置をとることになったものです。

発掘調査は、佐土原町教育委員会を調査主体とし、建設省九州地方建設局宮崎工事事務所の委託を受けて行うことになり、昭和55年12月5日発掘調査が完了した。

2. 調査の組織

調査主体 佐土原町教育委員会

調査責任者 佐土原町教育委員会 教育長 後藤典夫

事務局 佐土原町教育委員会 社会教育課長 田代 勉

" 社会教育課長補佐 関屋卓三

調査員 日高正晴(県文化財保護審議会委員)

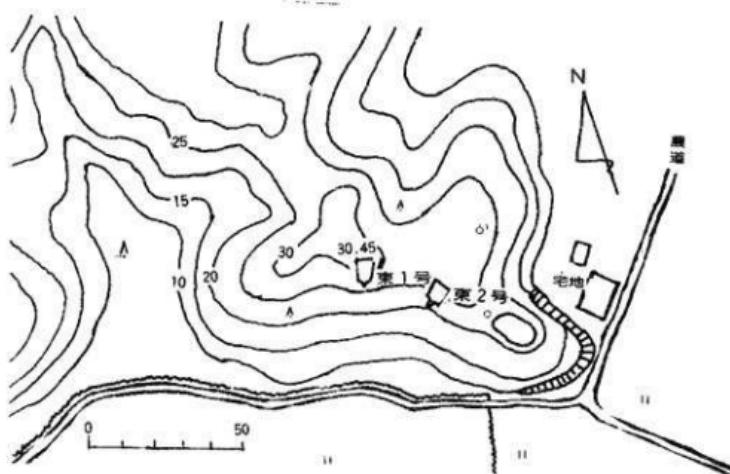
補助調査員 有田辰美(宮崎考古学会員)

" 山中悦雄(宮崎考古学会員)

第2章 位置と歴史的環境

上器田横穴群は、佐土原町広瀬を通過している国道10号線ぞいの、御坂下、西1kmの丘陵上に存在する。この丘陵地の直ぐ東側には屈曲した石崎川が流れていったが、現在ではショートカットされて、川筋は真っ直くなっている。また、この丘陵から北は、久峰方面に丘陵が連なっているが、最近では開発事業が進み、大分、住宅地化しつつある。さらに、この土器田横穴の南に開ける田畠の中には、国道2・1・9号線の黒田から国道10号線に通じる道路があり、その路上からは、この上器田横穴のある丘陵中腹を眺めることができる。

さて、この地域は、古代日向の郡別郡にあたり、一つ瀬川中流に展開される西都原、新田原の大古墳地帯と、大淀川の中流から下流にかけて存在する本庄、生目の大古墳群との中間平野地帯に位置し、さらに、この丘陵上からは、弥生時代以降、遺跡の多い宮崎海岸平野が一望に眺望される。また、この佐土原町一帯から宮崎市の丘陵地帯にかけては、国指定史跡の蓮ヶ池横穴群、それに池内横穴群、そして、南に延びる同じ丘陵上に柏田横穴群が展開している。これら宮崎市の横穴は279基も数えることができるので、佐土原町の横穴78基を加えると357基となり、宮崎県の横穴の大部分は、この下郡珂地帯から蓮ヶ池、柏田方面にかけて分布することになる。また、この土器田横穴群の付近を流れている石崎川の流域



第2図 土器田横穴群東1～2号位図

には多くの遺跡が確認されている。まず¹、この土器田遺跡の東方を走る国道10号線の、さらに東側約500mの地点に、弥生式中期頃の中溝遺跡が一つ葉有料道路敷内に発見され、昭和47年5月発掘調査された。^(註1)なお、その下流には弥生土器、土師器を出土した川添遺跡がある。また、この土器田横穴群の直ぐ南の方に擴がっている県立農業綜合試験場一帯には高塚古墳も点在している。さらに、この土器田から南の方約500mの地点に、円形墳の稻荷古墳（径約30m）が存在するが、周囲もめぐらされており、この下那珂一帯では中心的な古墳である。

この付近には、ほかに5基の円形墳が散在しているが、また、その西方、約500mの丘陵上にも6基の円形墳が分布している。²なお、この農業綜合試験場の裏山では昭和43年10月、3基の横穴調査が行われた。それから、鎌倉時代初頭の悠久年間につくられた「日向國田帳」には那珂郡の部に、那珂200町は八条女院御領になっており、当時、この那珂地方が農業生産力の高まっていた地域であったことが窺われる。

（日高正晴）

第3章 横穴遺構

下那珂土器田の丘陵（頂上部の標高30.45m）には、多数の横穴が散在しているが、從来、確認されている横穴だけでも10数基を数えることができる。なお、未発見の横穴も加えると、さらに基數は増加すると思われる。この土器田の横穴については、昭和49年5月、県教委の岩永哲夫氏、町教委の日高主事、それに筆者らで、国道バイパス予定線の埋蔵文化財調査を行った。その頃、曾我部長良氏によって、東1号横穴の内部踏査が行われた。この土器田の丘陵は東と西の両丘陵に分れており、町教委の調査によると、それぞれ、6基づつの横穴が認められた。そのうち、西側丘陵上にある3基の横穴は、昭和51年3月、県教委により、発掘調査が進められた。^(註4) 今回は開口していた東側丘陵上の2基の横穴を発掘調査したが、そのうち、西側を東1号横穴、東側を東2号横穴と名づけた。この両横穴は丘陵南斜面中腹(標高20m)に構築されているが、この丘陵は細粒砂岩の地層になっているので、この軟質層を掘削して横穴が造営されている。

1. 内部構造

1. 東1号横穴 (3図、図版1.2)

やや南北の方向に開口した横穴である。内部構造の規模としては、おそらく県内の横穴群のなかでも最大級のものである。主軸の方向は北25度西となっている。玄室は羨道部に進むに従い、少々幅が狭くなり、やや方形を呈している。玄室の奥行4.6m、幅、奥壁の部分で3.85m、両袖の地点では3.33mある。天井は寄せ棟造りになっているが、中央部の最も高い棟の所で、2.4mの高さとなっている。

玄室の床面には、壁にそって幅約10cmの方形の周溝がめぐらしてある。発掘調査に先立ち内部に入った時の感想では、玄室入口の部分の黒色土層が少し擾乱されていたので、以前に人が入室した可能性がある。そのことは30数個納置されている自然石のうち、玄室周辺部のものが多少動いているようである。しかし、中央部の石円いは原形を残しているのではないかと思われる。なお、遺物の上には約10cmの黒色土が覆っていたので、殆ど、当時の副葬状態を維持できたようである。玄室の床面は羨道部の方向へ漸次、下ってゆくが、中央部で、奥壁から1.6mの地点で急に約10cm段差が造られており、その後は次第に軽く傾斜をしながら羨道部の床面に連なっている。さて、注目の装飾壁画であるが、天井部が寄せ棟造りになっているので、屋根の部分は四方ともに前方に傾斜を有している。そのうち、玄室入口部分の屋根は、羨道が造られているため、屋根の部分が、わずかしかなく、結局、装飾壁画を有する壁面は奥壁と東西両壁面ということになる。しかし、東側壁は大部分、壁面が剥落しているので、奥壁と西側壁に装飾壁画が良く遺存したのである。また、玄室内部の屋根の部分には、全面に約10cmないし約12cmの幅で、農工具状の鉄器による削り取り痕がつくられ、ひとときわ美観を呈していた。なお東2号横穴の場合も同様であるが、玄室の壁面一面に白漆

喰状のものが付着しているが、これは砂岩層を浸透してきた水分が石灰質性のものであったので、あたかも、漆喰を塗布したような現象を呈したのではないかと思われる。

つぎに、羨道部であるが、この東1号横穴の場合は、二重に閉塞石が納置されており、さすがに、裝飾横穴の羨道を思わせるものがある。羨道の長さ 2.6m、幅は、玄室入口部分で 1.55m、西壁に幅10cmの堀り込みのある部分で 1.6m ある。羨道の床面の両側壁にそっては玄室の周溝が連なって造られている。前述した掘り込みのある所に30数個の自然石が納置されてあるが、その前方、約1mの線にも、約30cm～約40cmの比較的大きい自然石が納置されている。後者の石組みは羨道が扇状に括り始めた地点に施してあり、その点、被葬者に対する厚い信仰儀礼の表現と思われる。この例石から南の方は少し勾配をしながら下ってゆくが、その約3mの広がりのある地層から土師器の小片が2～3個検出されたので、あるいは、墓前祭などがとり行われた前庭部とみなすこともできる。期間の関係上調査することが出来なかった。

2. 東2号横穴（4図、図版4）

この横穴は東1号に比較するとき、やや小さくなっているが、玄室のプランは東1号に類似している。玄室は羨道の方へ向って、やや、狭くなっている。側壁にそって東1号のように方形の周溝があげらされている。主軸の方向は北45度西となっている。また、玄室の床面には自然石が配置されているが、多少、人工的に動かされた形跡がある。遺物は玄室の周辺部に副葬されていたが、それらは、あまり乱された模様はない。玄室の実行はは中央部で4.45m となっているが、幅は奥壁の部分で3.90m 玄室入口の所で2.95m ある。天井部は尖頭アーチ式であり、東1号のように側壁と屋根との区分はない。なお、床面からの高さは 1.1m となっている。また、玄室の全面には約10cm幅の農工具状の鉄器で削り痕が刻明に、美しく残されている。羨道部は長さ 1.6m、幅中央部 1.5m であるが、西側には側壁にそって、玄室からの溝がつくられているが、東側壁にそっては、殆ど認められない。なお、羨門の付近に数個の自然石が納置されていた。

2. 遺 物

出土した遺物は、須恵器、土師器、鉄器類（装身具もここに入れる）砥石その他である。東1号は須恵器が多く、土師は、破片が主である。鉄器類も10数点ある。しかし、東2号は、土器が少なく、寧ろ鉄製品が多い。この項は、須恵器、土師器、鉄器、その他について考據する。尚、遺物は、東1号、2号と分けてはいないが、須恵1~27、35、36、37、土師28~32は東1号であり、33、34、38、39は東2号出土である。2号はその旨注記することにする。

出土状況：東1号のほとんどが床直出土であり、流入土などによる保護の役目などにより、須恵器については完形が比較的多く、壺蓋のほとんどが床に附せられた状態での出土であり、これらについては当時の状態を示しているものと思われる。東1号に関してではあるが、床上43cmに掛、壺の1/2形が、出土しており、それらが無造作に置かれていたこととそれ以外とを考える時、また、弱冠、攪乱土をみると事などから部分的攪乱を認めなければならない。（狭道及び、狭道外の閉塞石付近出土の高台については墓前祭の関連が想起される）

東2号については、開口時期の新しさを物語るのか、流入土が少ない。これとて狭道入口上部の痕跡から、明らかにスコップ、鍬などによる意識的開口であり、その時の崩壊した土が大部分である。

1. 須 惠 器

壺蓋（10図1~7、16~19、25、図版5、6、7、8、）内面のかえりの有無により、A類、B類、に分けられる。

A類（1~7）内面にかえりのあるもので、宝珠状のツマミを有するものA₁（1~5）とそうでないものA₂（6~7）がある。

①は比較的丁寧なつくりである。頂上部より、徐々に傾斜しながら、落ち、体部に稜をもつ。口縁近くで浅く沈線状に窪み、口縁端下部は平坦に作り、口縁かえりは、口縁端より出ず、やや鋭どく、内に突き出している。外面はヘラ削りの後、ヨコナデ、内面はヨコナデによって調整されている。焼成は良く、灰白色を呈す。器高3.3cm、口径9.7cm、かえり部の口径（これからあと内口径とす）7.6cm、完形。

②器壁が体部に於いて膨らみ、体部端で薄くなる。かえりは鋭どく鳥嘴状を呈し、下方に突き出だが、口縁端より外に出ない。外面はヘラ削りの後ヨコナデ調整され、内面もヨコナデ仕上げされている。天井部にナデがみられる。石粒を胎土に含み、焼成も良く、青灰色を呈す。器高3.0cm、口径10.6cm、内口径9.0cm、完形。

③付け根部の器壁は薄く、口縁端は2.と同様丸くおさまる。かえりは三角断面形で下方に突出するが口縁端より外に出ない。外面はヘラ削りによって調整され、後をもつ。内面はヨコナデ、天井はナデによる調整、胎土に石粒を含み、焼成も良く、青灰色を呈す。ツマミは1、2に較らべ直線的である。器高2.7cm、口径9.6cm、内口径8.5cm。

- ④ ツマミは他に較らべて偏平な宝珠形、体部中央が膨らみ、天井部、付け根部は薄くなる。かえりは口縁端の大きさに較らべ小さく、内傾しながら張り出す。付け根は内にされ込み、頂部はヘラ削りで調整され、口縁から内面はヨコナデ調整されている。胎土に石粒を含み、焼成は良く、灰色を呈す。作りは丁寧で完形、器高 2.5 cm、口径 10.6 cm、内口径 7.6 cm。
- ⑤ 頂部にツマミの痕跡を残しており、1~4 同様宝珠形ツマミを有するものと思われる。体部に棱をもち、内湾気味に口縁に続く。かえりは口縁端と同一高であり、下方に張り出す。付け根もはっきりと彫されている。頂部はヘラ削りされ、体部から内面にかけ、ヨコナデ調整され、天井はナデが成されている。胎土に石粒を含み、焼成も良く、青白色を呈す。復元口径 10.8 cm。
- ⑥ ツマミがないものでかえりをもつ。頂部は平坦であるが、ヘラ削りの削り出しが縮着し小突起がある。口縁を少し欠くが、体部に棱をもち、付け根部外面に浅く窪む。口縁端は丸く、身受けは平坦でかえりも丸く、付け根は明確である。頂部はヘラ削り。内面はヨコナデ仕上げなされている。胎土に砂粒を含み、焼成はあまり良くななく黄灰色を呈す。器高 2.1 cm、口径 10.3 cm、内口径 8.4 cm。
- ⑦ 6.と同様焼成が良くなく軟質である。頂部は比較的平坦で、口縁から外反する。受けは浅く、かえりは口縁端より上でとまる。体部中央が膨らみ、付け根部が薄くなる。頂部はヘラ削り、体部はヘラ削りの後ヨコナデされ、内面はヨコナデで中程に 2 条の浅い沈線がはいる。天井はナデ、胎土に黒色の砂粒を含み、黄灰色を呈す。器高 2.6 cm、口径 10.6 cm、内口径 8.8 cm。

■類 (16~18, 25)

- ⑧ 頂部はヘラ削りによる平坦をなし、巻き上げ痕を残す。内湾気味に開きながら落ちる途中、沈線状の窪みをもち、口縁は垂直に落ちて、口縁端は少し尖る。頂部以外はヨコナデ調整されている。5 mm 大の石粒を含む為、处处に膨らみがあり、焼成は良く、灰白色、器高 3.3 cm、口径 9.7 cm、完形。
- ⑨ 頂部はヘラ切りされたまで、肩状に体部との境に棱をもち、その間に 2 条の沈線をみる。口縁は内傾し、口縁端は丸くおさまる。体部はヘラ削り、他はヨコナデが施されている。胎土は少量の砂粒を含み、焼成はあまり良くななく、灰白色で体部外面に黒灰色部分がある。器高 3.3 cm、口径 7.9 cm。
- ⑩ 口縁と体部のみの小片で、復元口径 11.6 cm を計る。内傾しながら口縁に結び口縁端は丸くおさまる。体部上部はヘラ削り、他はヨコナデ調整である。青灰色を呈す。
- ⑪ 器高 3.7 cm、口径 12.3 cm でやや大型の完形品。頂部はヘラ削りのため平坦を成し、内傾しながら口縁に結び口縁端はほぼ垂直に落ち、内側は内傾に削られ尖る。頂部はヘラ削りされ、天井のナデの他ヨコナデで調整、胎土に石粒を少量含み、焼成もよく青白色を呈す。
- ⑫ 頂部は広く、ヘラ削り、体部はヘラ削りの後、ヨコナデ、天井は同心円文叩きが残るが、ヨコナデにより調整されてる。胎土に砂粒を多く含み、焼成は不均一で硬軟の差がある。外面と内面の一部が灰白色で他は灰色。

坏身 (10図 8-15, 20-24, 図版 5, 6, 7, 8)

平底と丸底によって類別する。丸底は同時に蓋受けの為のかえりをもつ、尚この平底は丸底に対するもので完全に平底と看取し得るものは12の半形品だけである。この土器は他の遺物と違い搅乱土上に出土したものであり、破片があつめられたものであることを考えておく必要がある。

A類 (8-15) 口径10.0cm内外の平底の坏

- ⑧ 右回転のヘラ切り痕が残り、底部は全体的に下方に膨らむ。底部から内湾氣味にたちあがり、口縁部は僅かに外反する。体部内外面、口縁とヨコナデがなされ、底部内面はナデを受ける。少量の砂粒を含み、焼成も良く、青灰色を呈す。完形
- ⑨ 口径 8.5 cm、底部外径 6.5 cm の小型の完形、底部に右の回転ヘラ切り離しがなされ、8と同様、底部に弱冠の膨らみをもつ、やや外反しながらたちあがり、口縁は内傾する。少量の石粒を含み、焼成はよく青灰色を呈す。調整はヨコナデ。
- ⑩ 右回転のヘラ切りがなされ、図のような窓印を底部にもつやや内湾氣味にたちあがり、内外ともヨコナデによる仕上げ、少量の砂粒を含み、焼成も良く青灰色を呈す。器高3.5 cm 口経10.9cm
- ⑪ 底部はヘラ切り離し、底部からのたちあがりは内湾氣味に、器壁も口縁に向かい除々に薄くなり、小さく丸くおさめる。内外面ともヨコナデ調整され底部内面はナデによる。少量の石粒を含み、焼成も良く青白色、器高 3.0 cm、口径 8.8 cm。
- ⑫ 底部の切り離しは粗雑で内湾氣味にたちあがり、口縁端は丸くおさまり、内部に1条の沈線がはいる。調整は内外面ともヨコナデ、底部内面はナデによる。1/2 形の為胎土が出ており赤茶色の極めて硬い焼成である。外面は青灰色。器高 3.6 cm、口径 10.3 cm。
- ⑬ やや膨らみのある平底で、回転ヘラ切り離しが行われている。外開きにたちあがり、口縁は丸くおさまる。内外面ともヨコナデ調整され、少量の石粒を含み、焼成は良く、青灰色を呈す。
- ⑭ 底部は、右回転のヘラ切り離しが行われて後、あげ底氣味に押し上げられている。たちあがりは内湾し、口縁端は内傾し削られ、尖がる。体部内外面とも丁寧なヨコナデ仕上げ、底部内面はナデが施されている。器高 4.1 cm、口径 10.5 cm、青灰色を呈す。
- ⑮ 底部から内湾氣味にたちあがり、体部に2条の沈線をもち、それより垂直に口縁に結ぶ、塹とも思えるもので口縁端は三角形を呈し上部は丸くおさめる。ヨコナデによる調整、少量の砂粒を含み焼成も良く灰白色を呈す。外面に自然雰をみる。

B類 (20-24) 丸底で蓋受けとかえりをもつ。

- ⑯ 底部より、内湾氣味にたちあがり口縁付近にて外反する。口縁端は外反したまま延び、蓋受けは浅く、かえりは口縁端より肉厚で上方に僅かに出る。底部は粗雑なヘラ削りで体部から内面はヘラ削りの後ヨコナデによって調整され、特に体部から口縁外面は丁寧に作られている。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は良く黄灰色を呈す。口径11.9 cm。
- ⑰ 底部にヘラ削りの後×印のヘラ記号をもち、やや平底に作る。体部中央に浅い沈線状の

溝をもつ、口縁端は丸くおさまり蓋受け部に於いて口縁端と面する沈線が1条はいる。底部内面に朱らしきものが付着している。調整はヨコナデ仕上げ、胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良く、青灰色を呈す。完形

⑫ 口径13.2cm、器高3.7cmを計り、かえりが口縁端より8mmも張り出す。外面は自然釉が全面にかかり、仕上げは確認できないが、内面はヨコナデにより、底部はナデにより調整されている。底部外面に（12図21のヘラ記号をもつ）焼成は硬く、胎の部分は光沢をもち、橙色のくすんだ部分もある。内面は青灰色。

⑬ 器高3.0cm、口径10.5cm、底部より内湾気味にたちあがり、口縁部で小さく外反し、口縁で再び内湾し、口縁端は丸くおさまる。かえりは口縁端より3mm上に突き出る。底部はヘラ削り、体部から内面にかけヨコナデ調整されている。胎土に石粒を含み、焼成は良く、内面は青灰色を呈し、外面は淡い。

⑭ 22、23と同様、かえりが僅かに上方に張り出す。口縁部のヨコナデを除き、調整は粗雑で、一部に焼成時のひびがはいる。青灰色を呈す。

・壺 (10図26、図版8)

1点のみの出土で底部は丁寧な回転ヘラ削りによる調整で、胸部と肩にかき目状の模様がはいり、頭は僅かにあり低くたちあがり口縁に結ぶ。口縁端は丸くおさまり、垂直に内側に落ちる。口縁は随円形をなし、長径8.6cm、短径6.7cm、器高6.8cmを計る。焼成は硬く、青灰色を呈す。

・壺 (11図27、図版8)

1点のみの出土で丸底の長頸広口壺で胸部は、回転ヘラ削りにより丁寧に半球形に整形され、肩に1条の沈線をもつ、頭部付け根から僅かに外反しながらたちあがり口縁付近ではより外反する。口縁端は丸くおさめる。頭部内外に右上方に向かう隆起が残り、これはヨコナデの調整の後についたものである。口縁部の調整時が全調整の後に頭部をねじったことにより付いたものと思われる。ちなみに口縁は変形している。胎土に石粒を含み、焼成は硬く肩部に自然釉がかかり、黒灰色をなし、胴部は青灰色である。

・壺 片 (12、13図35~39)

38隻の胴部で別に出土した2点の接合で外面は平行叩き目にカキ目で調整され、内面は同心円文の叩き目がはっきり残り、その上を間隔をもってヨコナデされている。39も同一個体である狐灰色を呈す。以上が東1号出土。

⑮ 大甕の胴部と思われ、外面は平行叩き目の後、カキ目で仕上げ、内面は同心円文叩きがかなり重ねられている。青灰色を呈す。

⑯ 35と同一個体と思われる。調整その他同一様であるが、色調が淡い青灰色を呈す。

⑰ 大甕の口縁と思われ、玄室最奥部出土、口縁端は外傾1口縁端下部に突き出る。その間2条の沈線を有す。口縁から体部にかけ2条の沈線を2列配し、沈線下部に列点文を有す。内面は無装飾である。青灰色を呈す。

・不明須恵片 (11図34)

復元口径約28cmと大きい割に薄手作りの口縁部片である。黒鼠色を呈し焼成も硬く、高坏の口縁とも考えられる。(東2号出土)

II 土 師 器

坏身 (11図 28, 29, 31)

⑩ 器高 4.5cm, 復元口径15.4cmと大形で底部は僅かに浮いており、たちあがりは、口縁付近まで内湾しながら立ちあがり、口縁にて外反する。口縁端は丸くおさまり、内傾する。底部はヘラ削り、体部から底部上面はヨコナデによる、焼成は良く赤褐色を呈す。1/2形。

⑪ 器高 4.6cm, 口径11.4cmで底部が少し膨らみ、内湾気味になだらかに立ちあがりながら器壁は薄くなっている。口縁は細く丸くおさまる。調整は丁寧なヘラナデにより仕上げ、一部にヘラ磨き痕がみえる。焼成は良く、黄白色を呈す。ほぼ完形。

⑫ 須恵の坏身11, 12と同じ器型で、焼成の極めて悪い須恵という様呈体である。底部にヘラ切りがみられる他は、磨耗の為明らかにし得ない。色はくすんだ黄褐色を呈す。完形。

・高 台 (11図32)

1点のみで狭道入口の閉室石と思われる石組の中に出土頭部より角度をつけ除々に開く。頭部はほぼ垂直にたちあかり僅かに台の口縁が外に開く形である。台は僅かに窪む。胎土に多くの砂粒を含み、焼成はあまり良くない。頭部はヘラ削りによる面取りを行い多角形を形成している。黄白色を呈す。

・平 瓶 (11図30)

器高14.1cm, 復元口径 6.2cmを訂正。本横穴に於ける数少ない土師で本格的な器型である。玄室奥部に向かって右側角につけられて形での出土であるが、か磨耗が激しく、底部のヘラ削りの他は判然としない。胎土に赤色粒(2mm大)を含み、焼成は普通である。体部内面には頭著に輪積痕を残し、外面にその延長としてのひびがはいる部分もあり、10本面至11本の粘土紐にする製作を示している。器壁は底部が 1.2cm位であり、肩部と口縁が 5mm位である。底部は上げ底になって、肩部をやや平に作り頭部より外反しながらたちあがる。

⑬ 不明土器 (11図33)

口径11.8cmで中央部に径4cm下の穿孔をもつ、坏身が高坏の上部が不明である。外面は口縁のヘラナデ仕上げの他、剥落の為調整法について明らかにし得ない。内面は水挽き様仕上げである。焼成は比較的硬く橙色を呈す。

土器小結

東1号の須恵器についてみると坏蓋、坏身、長頸壺、壺、甕片があり、完形品が比較的多く、明らかに時期を異なる2タイプがある。

これらを「天觀寺山窯跡群」、「豊前地方の須恵器窯跡」などを参考にみると蓋A・類は丁寧なつくりでかえりガ口縁端と平行もしくは内側にとどまる傾向にありセット関係をみる

とき坏身A類とを考えるのが妥当であると思われる。これらは伊藤田窯跡群及び天觀寺山窯跡1区出土資料と資料と類似点をみることができることから須恵器編年V様式の時期に相定される。蓋B類は所謂、有蓋坏であり、これらの中には22のようにIII B様式を思わせるものもあるが、山田東窯跡及び大觀寺山窯跡II区1号出土資料に類似点を持ち、IV様式を相当するものと考える。坏身B類については完全なセット関係を特定することはできないが、21のように内部に朱の付着が認められることやかえりの内傾の状態などからこれらを坏身としたもので、焼成が異なるが坏身B類をセットして使用したものと考えられる。

壺についてはその頸が極めて短いこと、肩部の立ちあがりなどからV様式に相当するものと思える。

長頸壺であるが高台をもたない比較的古朴を示めることから同じくV様式が想定される。

土師について、高台、平瓶に同様の資料を「土師器集成」にも求めるることは出来ない。極めてめずらしい資料と言え、V様式に相当する須恵器平瓶に極めて近い器型を示し、これらの模倣である可能性が強いものと思われる。

東2号の須恵器については坏身類の出土ではなく長頸の大甕の口縁の突帯、列点文、同心円文叩き平行叩き目の後のカキ目仕上げなどの調整法からVI様式に相当するものと考えられる。

以上、土器から見る限り、東1号は6世紀中葉から7世紀中葉の土器を伴う。このことは、骨の分布などを考え併せてとき追葬による副葬品としての時期の違いを表わしているものと考えられる。

東2号は、東1号の追葬の時期よりも後の構築で7世紀中葉から後葉かと思われる。

(有田辰美)

III 鉄 器

鉄 器 (14図(1)~(34), 図版10, 11)

鉄器は34点出土した。武具、農工具、馬具があり、内訳は鉄鎌9点、鉄鎌茎8点、馬具4点、鎌1点、鉄斧1点、不明鉄器2点である。

(1) 武 具

鉄鎌 (14図(1)~(9), (16~23))

鉄鎌はすべて平根式鎌である。(1)は身長約5cm、身幅2cm、厚さ3.5mm、平造り柳葉式。(2)は身長4cm、身幅3.3cm、厚さ4mmをはかり矢矢式。(3)は身長約5cm、身頭部幅3cm、厚さ2mmの矢矢式。(4)は身長6.3cm、幅約3cm、厚さ5.5mmの三角鎌。(5)は身幅5.5cm、身頭部幅2.5cm、厚さ3mmで矢矢式。(6)は身長5.2cm、身頭部幅2.8cm、厚さ2mm。矢矢式。(7)は身長約6cm、身頭部幅2.5cm、厚さ3.5mm。矢矢式。(8)は身長約6cm、身頭部幅2.7cm、厚さ4.5mmの矢矢式。(9)は身長6.3cm、身頭部幅2.7cm、厚さ3mm。矢矢式。すべて保存は良好で、竹の矢柄も(3)を除いて遺存しており、(1), (5), (7), (8), (9)には桜皮も認められ

る。(1), (2), (3)は東1号出土,(4)~(9)は東2号出土。(10)~(23)は鉄鎌の茎と思われる。(19)~(21)は東1号出土。(22), (23)は東2号出土。

刀子 (14図10)~(19)

(10)は刀身の先端部が欠損している。現存長15.4cm、身幅約1.3cm、厚さ7mm。刀身断面は長五角形で鎌を持つ。片闇で茎には木質が残存する。東2号出土。(11)も刀身端部が欠損している。現存長約12cm、身幅1cm、厚さ2.5mm。角背平造りで闇部はない。把の木質が遺存する。東2号出土。(12)は刀身の過半と基端部が欠損する。現存長約12.5cmで身幅1cm、厚さ5mm。刀身断面は長五角形で鎌造り、あるいは平造り船刀。片闇式。1号出土。(13)は刀身前半部が欠損していて現存長約8.8cm、身幅は身中央で約1.2cm、厚さ2mm。平造り両闇式で闇部に鉄鎌がまいてある。柄部には木質が遺存する。東2号出土。(14)は刀身切っ先部で現存長約4cm、身幅1.2cm、厚さ3mmの平造り。東1号出土。(15)は刀身部、柄部の大部分を欠損しており闇部のみ遺存する。現存長約4cm、身幅1.5cm、厚さ5mm。柄部はやや上ぞりぎみで片闇式。東2号出土。

大刀 (15図24), (25)

(24)は主に近い刀身で角背平造りである。身幅約3cm、厚さ6mm。副幕時かどうかは不明だが人為的に折られている。(25)はやはり刀身部で平造りであるが船刀に近い。身幅約3cm、厚さ8mm。鍛造時の空洞が部分的に認められる。(24)は東2号出土。(25)は東1号出土で、(26)は(26)の鉄と組みになり頭槌大刀となる可能性がある。

鉄 (15図 26)

破片が3片出土した。直接には接合しないが同一の鉄片である。復元長径約9cm、短径7cm、厚さ4mm、8窓の鉄で倒卵形というよりは橢円に近い。2号出土。

(2) 金工具 (15図、31)

現存長約12cm、幅2cm、背部の厚さ3mmで断面形はくさび形を呈する。遺存度は、良好で中央部がややへこみぎみ。端部は外反する。東2号出土。

鉄斧 (国版)

國化しえなかつたが鉄斧の刃部とおもえる部分が東2号から出土した。

(3) 馬具 (15図、27)~(30)

(27), (28)は締め金具で一部欠損しているが、ほぼ金形を知ることができる。(27)の止め金具は方形の断面を呈する。(29), (30)も馬具の一部と考えられる。

(4) 不明鉄器 (15図32), (33)

器種の判然としない鉄器が2点出土した。(32)は残存部長約7cm、径9mmの鉤状金具で一端はとがっている。あるいはかすかにと思われる。(33)はV字状の棒状金具で断面形は長方形を呈する。一端は欠損しているが、他端ははするどくとがる。少々ねじれている。鍛あるいは釘の折れまがったものとも思えるが断定することはできない。

装身具 (15図34)~(37) 国版10)

装身具には金環がある。すべて1号出土である。(34)は銀環で3.3×2.9cm 従9mmの大きさ。(35)~(37)は金環で(35)は2.8×2.4cm、径6mm、(36)は2.2×2.0cm、径5mm、(37)は2.6×2.2cm、5×4mmの大きさ。(38)は一部、(37)は大部分が腐食しており鋼の地金が露出している。

鉄器・装身具出土状況

東1号横穴(図版)

1号横穴出土の鉄器・装身具は分散した出土状況にあるが、ほとんどの鉄器が床面上から出土しており後世の攪乱は考え難い。刀子(12, 14)、銀環(34)は奥壁よりのベッド状高まりから出土した。金環(36)は玄室中央部の礫榔状石組中から出土。金環(39, 40)、鉄鎌(3)は奥壁にもかって右の側壁袖よりの部分から出土した。この3地点は石組みの存在からおそらくは遺体の安置場所と思われる。鉄鎌(1)は奥壁部の溝中に溝と平行におかれていた。大刀身(24)は羨道閉塞石前に、刀子(14)は閉塞石石組上より出土した。

東2号横穴(図版)

鉄器出土位置は奥壁左隅みから左側壁の中央部にかけて、左袖部、右袖部の3か所に大別できるが、刀子(10)、鉄鎌(6)、鉄鎌基(2)以外のものは奥壁左側から左側壁中央部近辺に集中する。鎌(31)のように、いくぶん離れた位置から出土する同一個体片の存在や鎌(26)と大刀身(24)のように同一個体となる可能性のある破片の存在から、攪乱をうけているのは確実だが、大幅な散逸はみられないでおよその位置は動いていないと推定される。鉄器の出土状況から、遺体の近辺、おそらくは遺体頭部もしくは足部に配置された状況がうかがられる。

鉄器

量の多さとともに、種類が豊富なことが鉄器の特徴である。鉄鎌は平根の三角鎌、柳葉鎌斧筋があり刀子には平造りのものと鎌を持つものがある。東2号出土の鉄器は武具、馬具、農耕具がそろっている。鉄鎌が平根斧筋のものを主体とするものとあわせて、他の一般的な横穴あるいは地下式横穴と比較した場合の著しい特徴だといえるだろう。

鎌の形態などから、東1号の方が東2号よりいくぶん古い様相を示している。

(中山 悅雄)

IV その他の遺物

砥石(11図40、図版9)

長径の小型の砥石で東2号出土である。使用により中央部は僅かに窪む。

人骨(図版9)

東1号はそのほとんどが粉末状になり僅かに白く残っていた程度で奥部ベット状高まりに大臼歯、小臼歯など10点が出土している。また中央部石組(石井状遺構)内に一つのまとまりを示しており、複数の埋葬を想像させる。

東2号は、大腿骨など比較的骨片が残り、その周辺に粉末状に拡がった状態の出土である。その状況は(6図が示すように3個所のまとまりをみることができ、これまた複数の埋葬を考えさせる。尚、人骨についての調査は研究機関に依頼中であり、詳細はここでは省くことにする。

第4章 壁 画

このたび発掘調査した2基の横穴のうち、東2号横穴の方には、壁画は全く認めることはできず、東1号横穴のみに線刻壁画が確認された。ところで、この線刻壁画が発見された動機は、発掘調査3日日の昼食時間に、たまたま調査員が玄室内に入ったところ、壁面に線刻壁画らしきものが見えるということで大騒ぎになった。仔細に観察すると、大体、薄暗い横穴の玄室内部が正午頃を中心にして、午前11時頃から午後1時頃までの2時間ぐらい南面する狹道から太陽の直射光線が差し込んで内部を照らし、肉眼でも明瞭に線刻壁画を見ることができたのである。

東1号横穴線刻壁画（図版1）

内部構造の項で述べたように、玄室内部で線刻壁画が主として遺存していたのは、奥壁と西側壁である。この玄室壁画の主体をなしているものは、奥壁に描かれてある馬、鳥、人物などの線刻画であるが、それを取りまいて連続三角文が線刻されている。また、三角文内の彩色朱痕は、西側壁に比べ奥壁の部分の方が、より朱色が認められた。

1. 奥壁線刻画（7、8図、図版1、3）

正面の奥壁は、玄室床面から上に、1.3mの縦で寄せ棟造りの屋根の部分になるが、この前方へ傾斜を有する三角形状の区画の中に馬、鳥、人物などの形象線刻画が描かれてある。この壁面には幅約10cmの削り痕が平行して施されている。ところで、この三角形状の区画の頂点から約30cm下った地点に、約1mの横線が引かれ、この壁面主体部はこの上下の区画線の中に線刻されている。まず、上部に馬が二匹並んでおり、その直ぐ下に人が二人並び立っている。さらに、その左側には、2羽の鳥が左方を向いて描かれてある。なお、その左の方には鳥の羽状のものが認められる。また、最下部には動物の壁画も線刻されているが、その両足の右の方に楕円形の一部分と思われる線刻が描かれてある。なお、上部区画線の上に、鳥らしき壁画が一羽認められる。さらに、三角形状の屋根形から下には、連続三角文が描かれているが、その下段には三角文が施文してあったかどうか、剥落部分が大きいために不明である。以下、形象線刻文と幾何学文について説明する。

(1) 馬

奥壁に描かれた形象線刻画の中でも、極めて鮮かに描かれており、特に、西側の馬は全体の線刻も明瞭であり、古代馬の面影が歴然と残されている。両方の馬とともに、長さは28cmであり、頭、両足、尾なども明確に描かれてある。特に、面の表情がよく出ている。

黒木正雄前宮崎大学農学部教授の調査によると「この線刻馬は、蒙古系の中型馬に属し、秋月藩時代から都井岬に放牧されている国指定の（岬馬）系統に属するようである」と、

(2) 鳥

鳥の線刻画は3羽描かれてある。最初、観察した時は魚類かと思われたが、左端に、口ばしも描かれていたので鳥類ということが判明した。しかし、中央に位置している右側の鳥は口ばしも線刻していないので最初は魚のように判断したのであるが、左端の鳥と全く、同一形式に描かれているので鳥を現わしているものと思う。なお、最上部にある壁画も、下半部のみが遺存していないようであるが、2羽の鳥と同一形式であるので、鳥とみて差支えない。それから、中央部の2羽の鳥は、何れも長さ21cmである。

(3) 人物

中央部に描かれている人物像は、線刻が明らかでなく、馬、鳥などのように刻明な施文ではないが、手、足の部分は観察できる。人物2人を中心にして、2匹の馬、2羽の鳥という組み合わせは信仰儀礼的にも興味のあるところである。

(4) その他の形象壁画

形象壁画の最下位に描かれ、両足を有する動物である。おそらく、犬か猪の部類と考えられるが、頭の部分が明瞭でないので、断定をくだすことはできない。長さは胴の部分だけでも16cmある。また、最も左端に線刻されてあるものは鳥の羽のようでもあり、もしかすると蝶の羽であるかもしれない。

(5) 三角文

奥壁の連続三角文は中央部が少し不明になっているが、一列に並んだ三角文は線刻も鮮やかであり、特に、右側の三角文には比較的濃ゆい朱痕が遺存していた。

2. 西側壁線刻三角文（7図、図版4）

西側壁を6段に区分し、連続三角文が配列して線刻してある。床面から二段目までは三角文の高さが約50cmもある大形のものであるが、それから上部は高さ約30cmの三角文が施文されている。しかし、玄室の奥に進むに従い、床面が高くなるので、それに沿って、三段目以降の連続三角文は右の方へゆくに伴い、三角文を小さく描いて壁画全体のバランスをとっている。この西側壁の三角文にも部分的に朱痕が観察できる。何れにしても、側壁全面にこれだけの三角文が配列してあることは、横穴の場合、極めて類例がない。

（日高 正晴）

第5章 結 語

以上、宮崎県にとっては、かって発見されたことのない、画期的な線刻壁画を中心にして論述してきた。これまで、これに類するものとして学術調査されたものは、昭和41年3月、^(註7)宮崎市蓮ヶ池の梶田横穴^(註8)南1号と昭和52年9月、宮崎市広原横穴群の2ヶ所ぐらいであるが、それらは、このたびの土器田横穴に見られるような、いわゆる日本の装飾古墳文化の範疇に入るような本格的な線刻壁画ではない。この土器田の装飾横穴には、奥壁の形象壁画を中心に、連続三角文が両壁画に施してあり、さらに、その三角文内には朱彩色色か施してある。このような横穴線刻壁画は極めて珍しく、日本装飾古墳文化の上からも注目されるところである。また、この壁画の中の馬について考察してみても、日向古代文化史上、有力なる資料の発見といわねばならない。すなわち、日本書紀の推古天皇20年の条で、蘇我馬子が奉った寿歌に対して、推古天皇が、こたえて詠まれた歌に「真蘇我よ蘇我の子らは、馬ならば日向の駒、大刀ならば、兵の真刀、諸しかも、蘇我の子らを、大君の、使はすらしき」とあるように、当時、日向は日本における代表的な馬の産地であった。また、このことは、古代日向における馬を実証⁻するものとして、重要視しなければならない。さらに、興味のあることは、この東1号横穴の築造年代が、ちょうど、推古天皇が蘇我馬子に歌を賜った飛鳥時代と符合していることである。さて、これらの線刻壁画を、なぜ横穴内部に描いたかということであるが、それはおそらく、被葬者の来世に対する鎮魂のための呪術的な信仰儀式を現わしているものと思われる。ところで、装飾古墳といえば、西九州の熊本県、福岡県が日本における中心地帯とされ、東九州は日田地方など、豊後地方を除けば装飾古墳文化圏ではないとされてきた。特に宮崎県では、これまでほとんど、本格的装飾古墳は皆無の状態であった。それで、日向の古墳文化が、装飾古墳文化圏に入っていないという従来の学説を打ち破るものとして、このたびの線刻壁画は極めて注目すべき新発見である。その意味においても、土器田の横穴壁画は、西九州古墳文化圏との交流を考察する上に、貴重な研究資料になると思う。また、横穴線刻壁画で、連続三角文を玄室内部の側壁に施してある例は、全国的に見ても数少なく、熊本県玉名市ナギノ横穴^(註9)7号、10号、27号、それに山鹿市付城横穴^(註10)28号、32号などであるが、これらは連続三角文、同心円など幾何学文のみを彫り込んでいるので、土器田横穴のように、連続三角文と動物、鳥、人物などを、ともに線刻しているものは、全国装飾横穴の中でも類例がなく、画期的な線刻壁画の横穴といえる。連続三角文を有する装飾古墳は、熊本県の大坊古墳、福岡県の日ノ岡古墳、上塙古墳、そして、佐賀県の太田古墳などの高塚墳に見られるが、これらの古墳は、すべて石室墳であり、装飾も線刻ではなく彩色されている。福島県の中田横穴にしても彩色壁画である。また、装飾横穴は分布地域が極めて限られており、古墳文化の中心地である畿内地方には、ほとんどなく、西九州、神奈川県、茨城県、それに福島県などの辺境に集中していることは明らかなければならない課題である。また、両横穴の構築年代であるが、内部構造的に見ると、東1号横穴の寄せ棟造りから東2

号横穴の尖頭アーチ式へ変遷するということを考慮に入れると、東2号横穴の方が年代的には少しどうようであり、また、東1号横穴の土器編年上からも考えて、7世紀前半から中葉頃に比定することができる。以上、土器田の装飾横穴を中心に述べてきたが、これらは宮崎県にとってだけでなく、日本の古墳文化研究の上からも極めて貴重な横穴といえる。

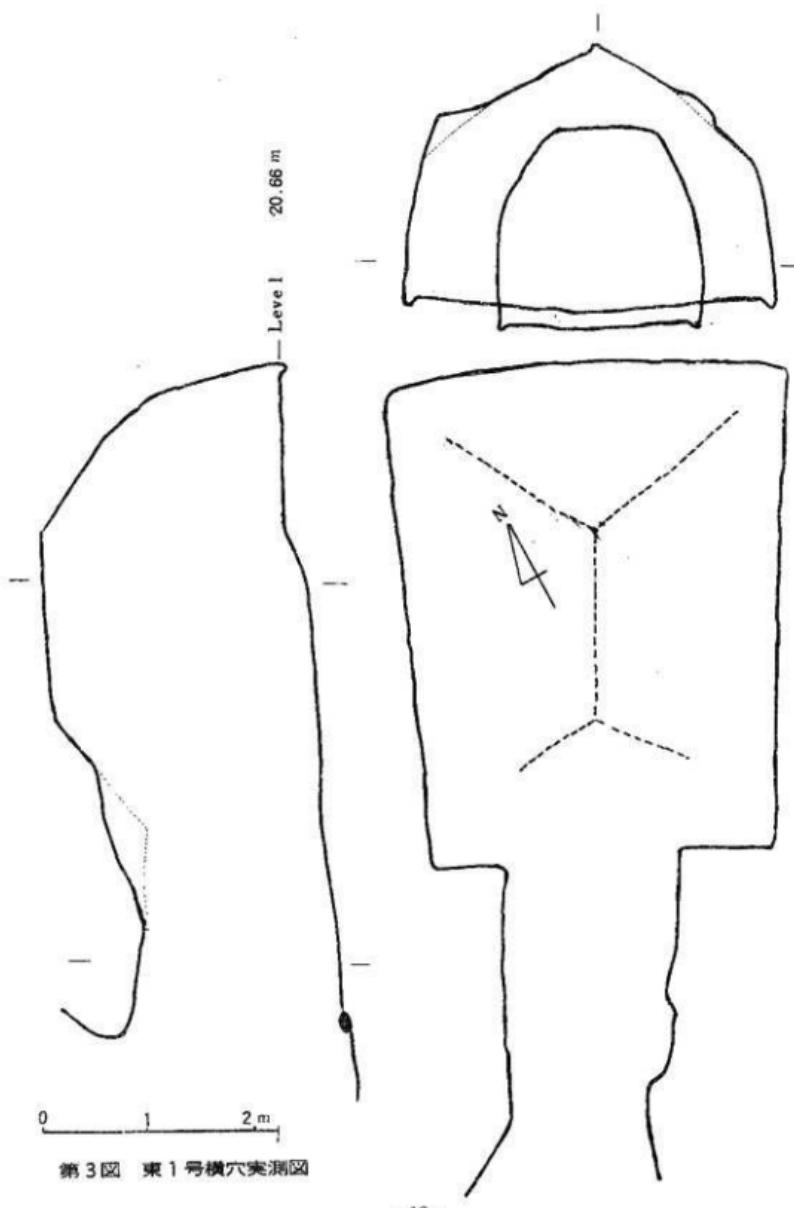
(日高正晴)

註

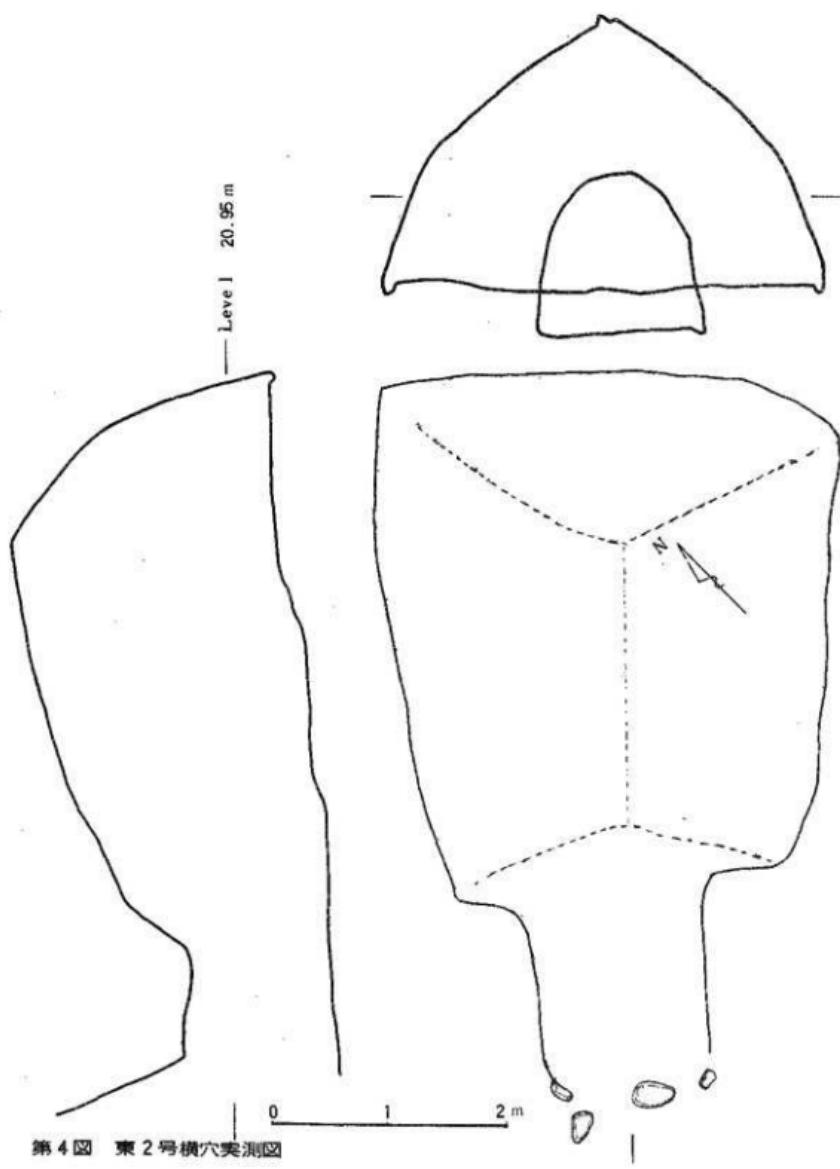
- (1) 石川恒太郎「佐土原中溝遺跡調査報告書」宮崎県道路公社（昭和47年）
- (2) 石川恒太郎「佐土原町川添遺跡調査報告」宮崎県文化財調査報告書18集（昭和51年）
- (3) 石川恒太郎「佐土原綜合農試裏横穴古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書第16集（昭和47年）
- (4) 曾我部長良「日向の横穴」（昭和50年）
- (5) この3著の横穴調査の報告書は近く県教委より予定。
- (6) 小田富士男他「天觀寺山墓群」北九州市教委（1977年）
- (7) 「陶邑I」1967年、「陶邑II」1978年、「陶邑III」1978年、中村浩他
- (8) 黒木正雄「御崎馬に関する研究」宮崎大学農学部研究報告19巻2号
- (9) 鈴木重治「宮崎県の原始絵画」古代学研究45（1966年）
- (10) 石川恒太郎、野間重孝「庄原横穴群」宮崎市文化財調査報告書第5集（1979年）
- (11) 「装飾古墳と文様」古代史発掘⑧（装飾古墳地名表）講談社
- (12) 「熊本県の装飾古墳白書」熊本県文化財保護協会（1974年）

第14図と図版10, 11対照

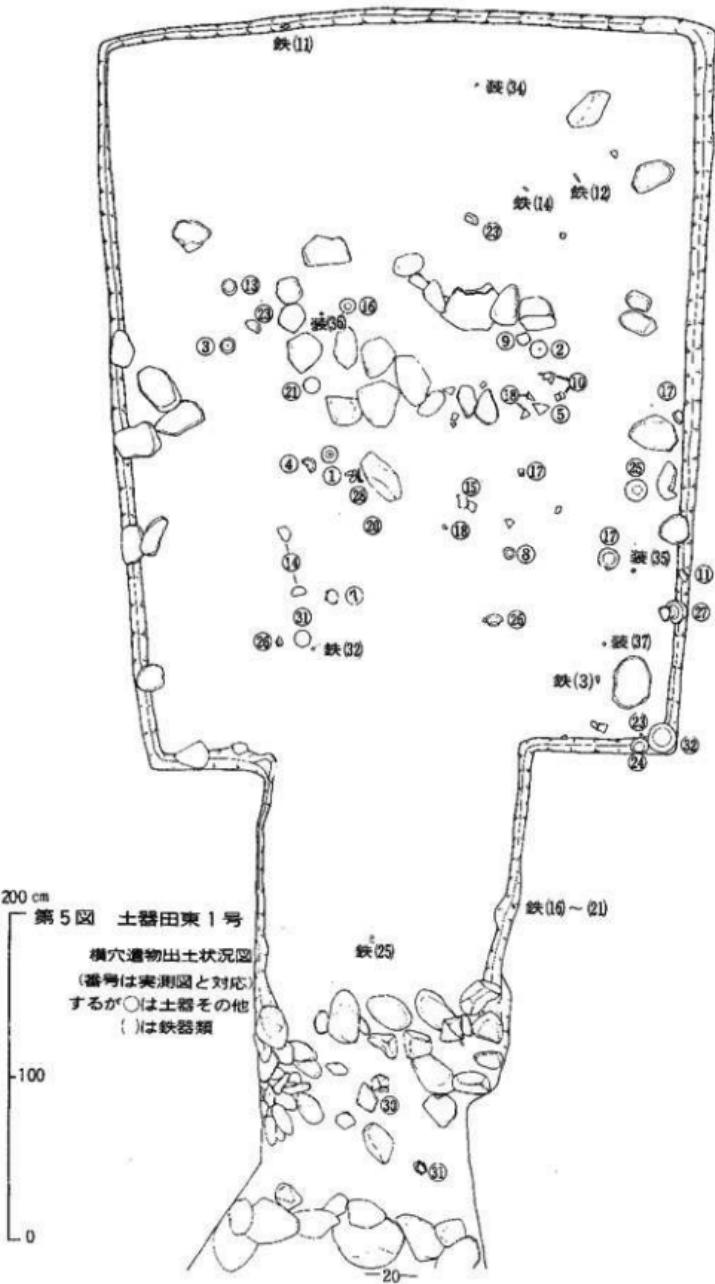
(1)	①No. 2	(11)	②No. 8	(2)		31	②No. 13
(2)		(12)	①No. 4	(22)	②No. 11	32	①No. 1
(3)	①No. 5	(13)	②No. 9	(23)		33	②No. 19
(4)	②No. 10	(14)	①No. 3	(24)	②No. 4	34	表No. 4
(5)	②No. 15	(15)	②No. 13	(25)	①No. 7	35	表No. 2
(6)	②No. 2	(16)	①No. 6	(26)	②No. 3	36	表No. 3
(7)	②No. 7	(17)	①No. 6	(27)	②No. 6	37	表No. 1
(8)	②No. 18	(18)	①No. 6	(28)	②No. 11		
(9)	②No. 14	(19)	①No. 6	(29)			
(10)	②No. 1	(20)	①No. 6	(30)			

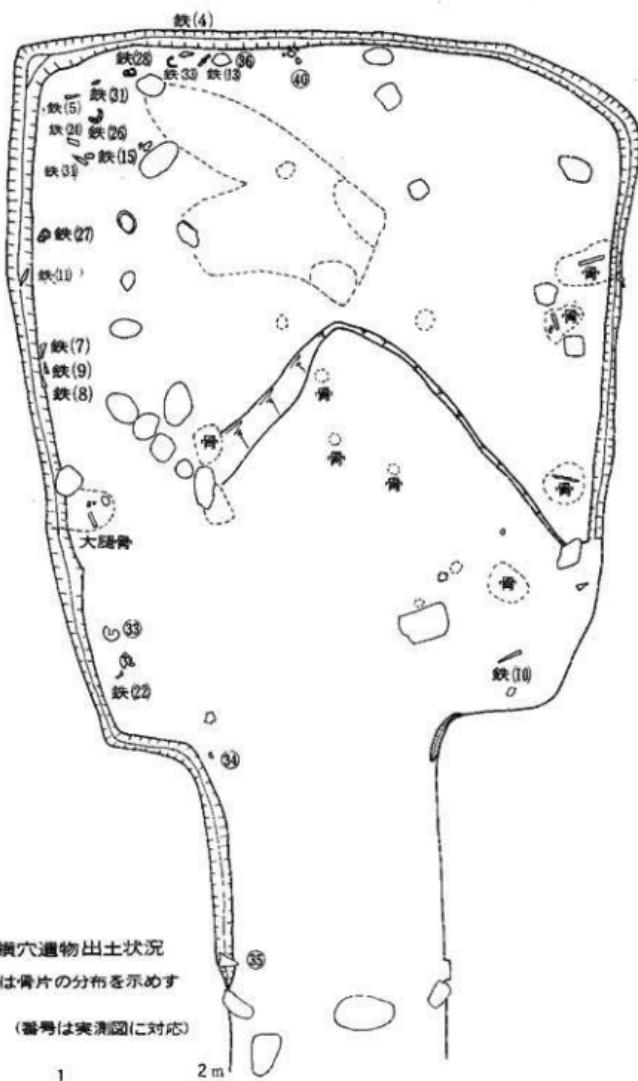


第3図 東1号横穴実測図



第4図 東2号横穴実測図



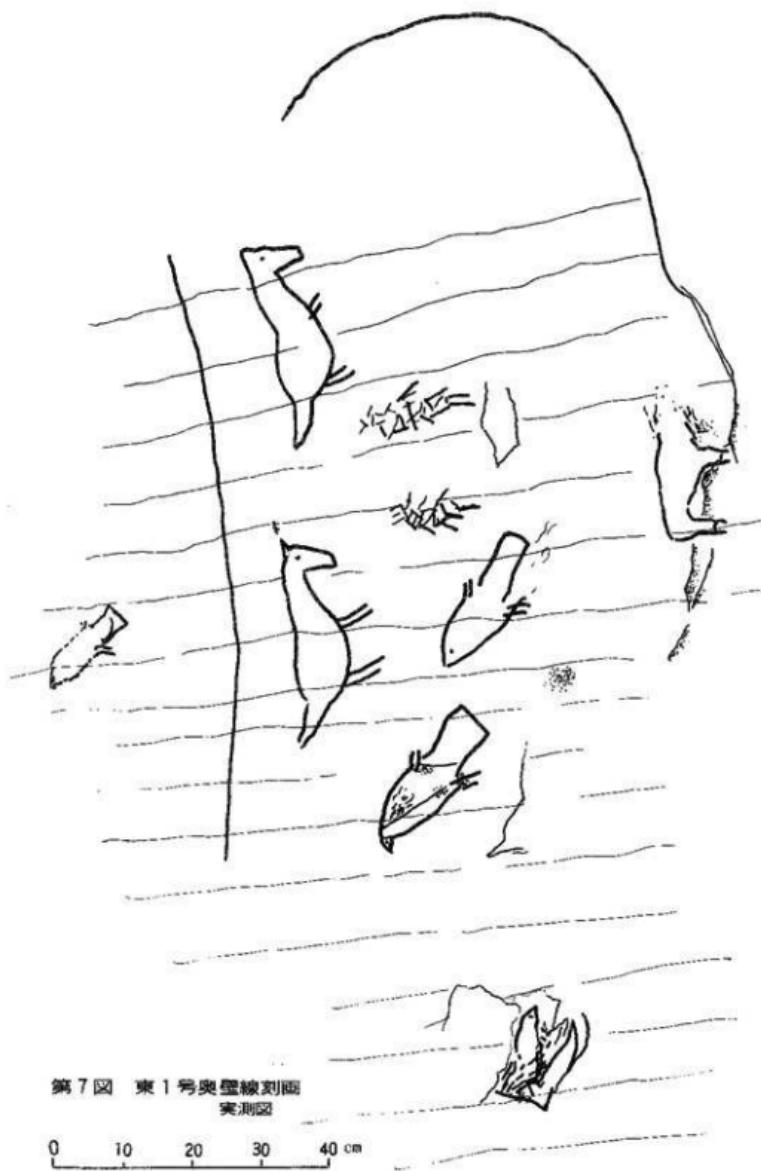


第6図

東2号横穴遺物出土状況

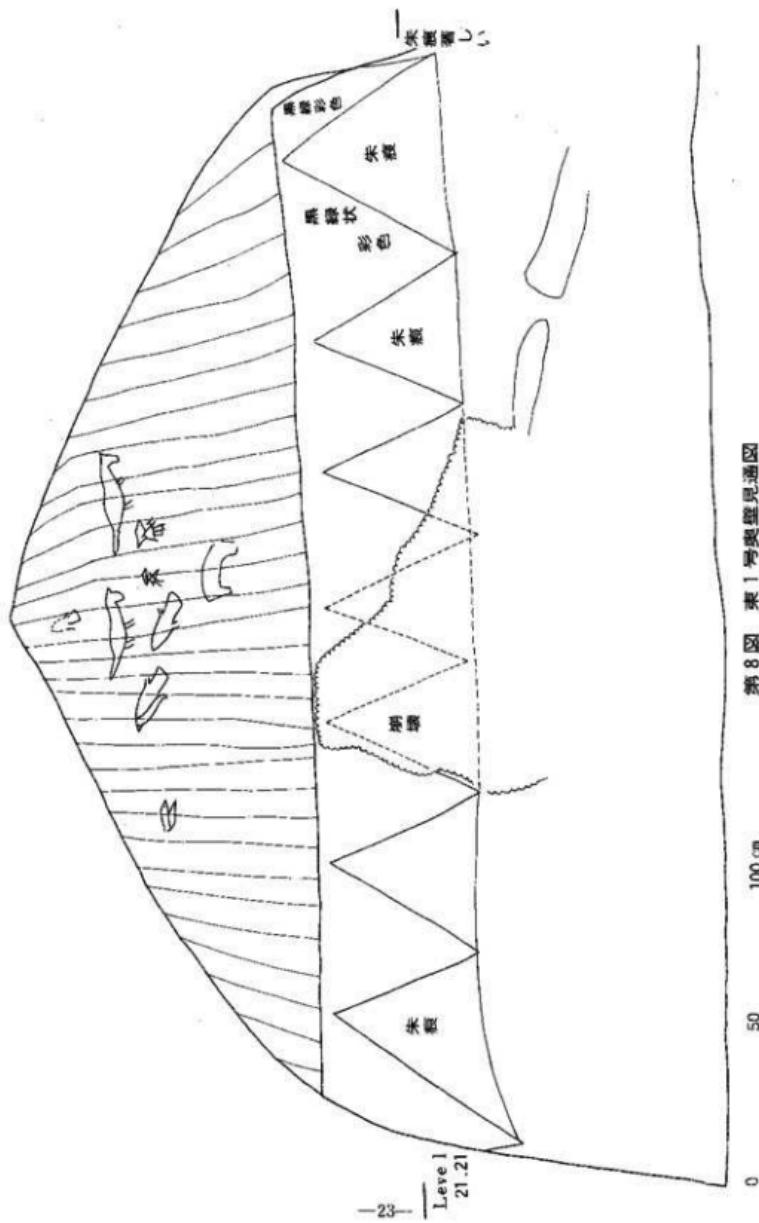
(◎) は骨片の分布を示す

(番号は実測図に対応)



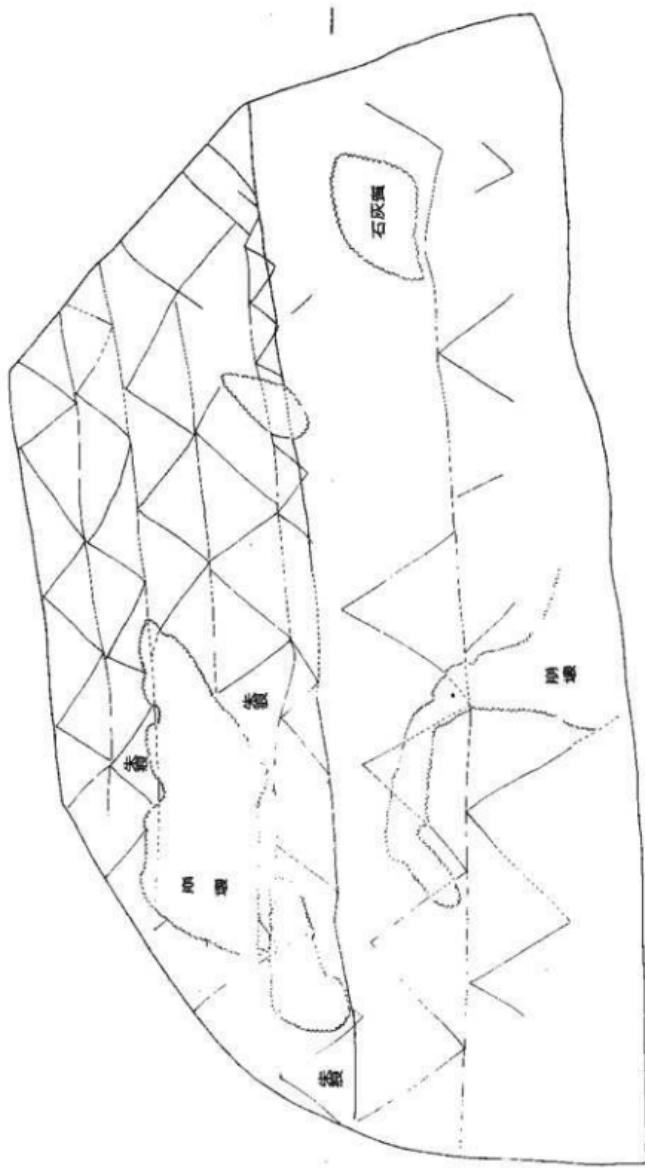
第7図 東1号奥壁線刻面
実測図

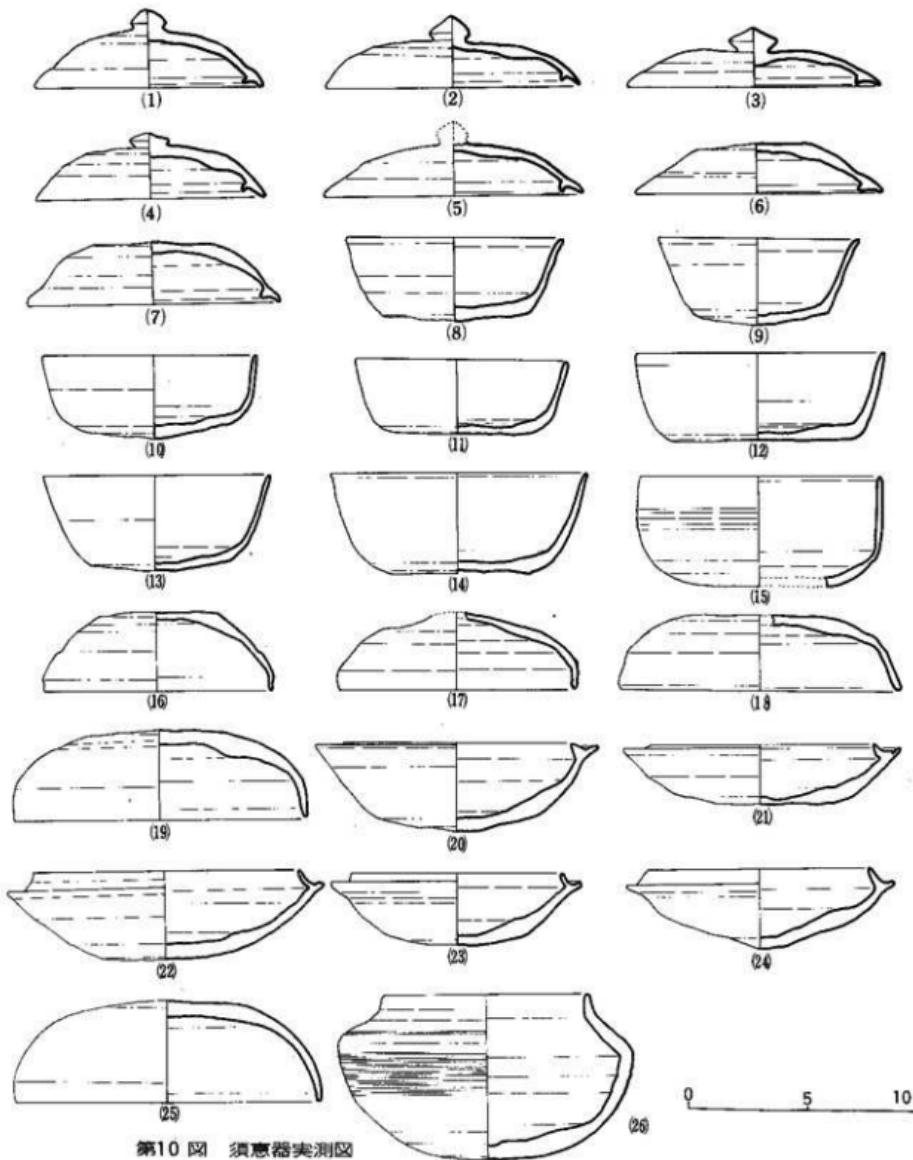
0 10 20 30 40 cm



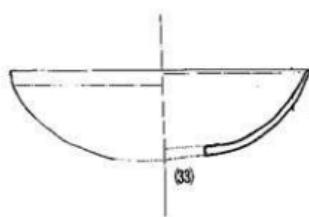
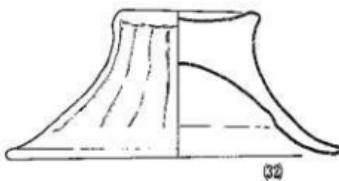
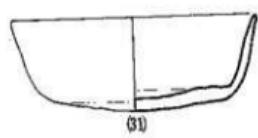
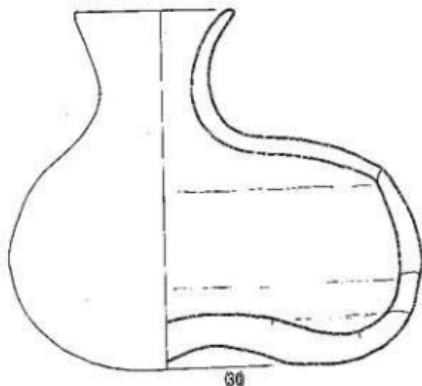
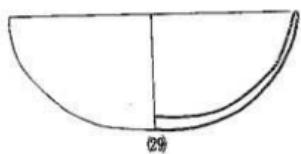
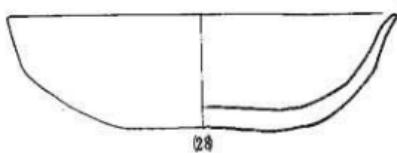
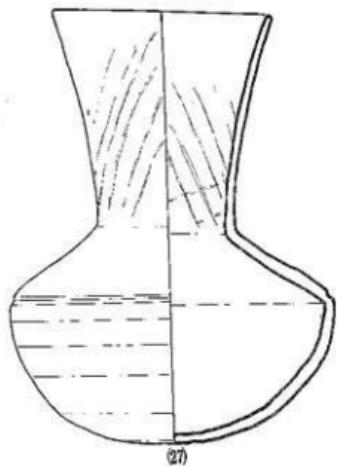
第9図 東1号西側壁見通図

0 50 100 cm

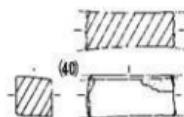




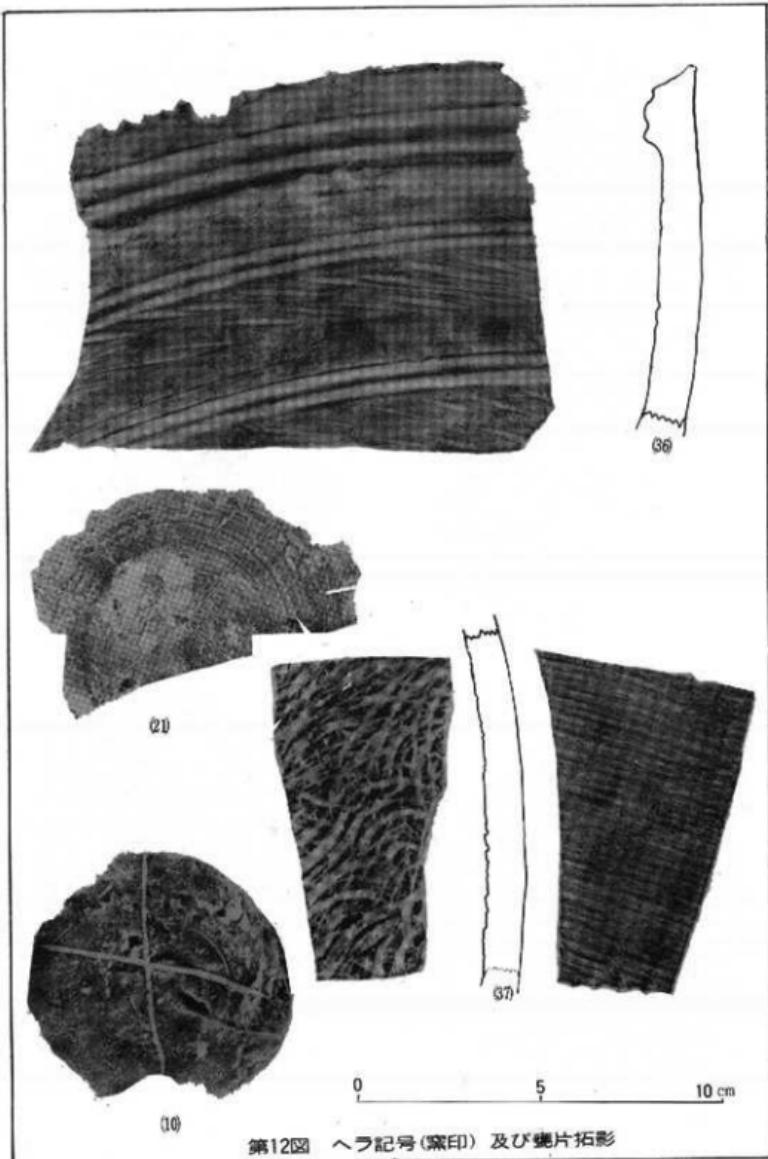
第10図 須恵器実測図



0 5 10 m

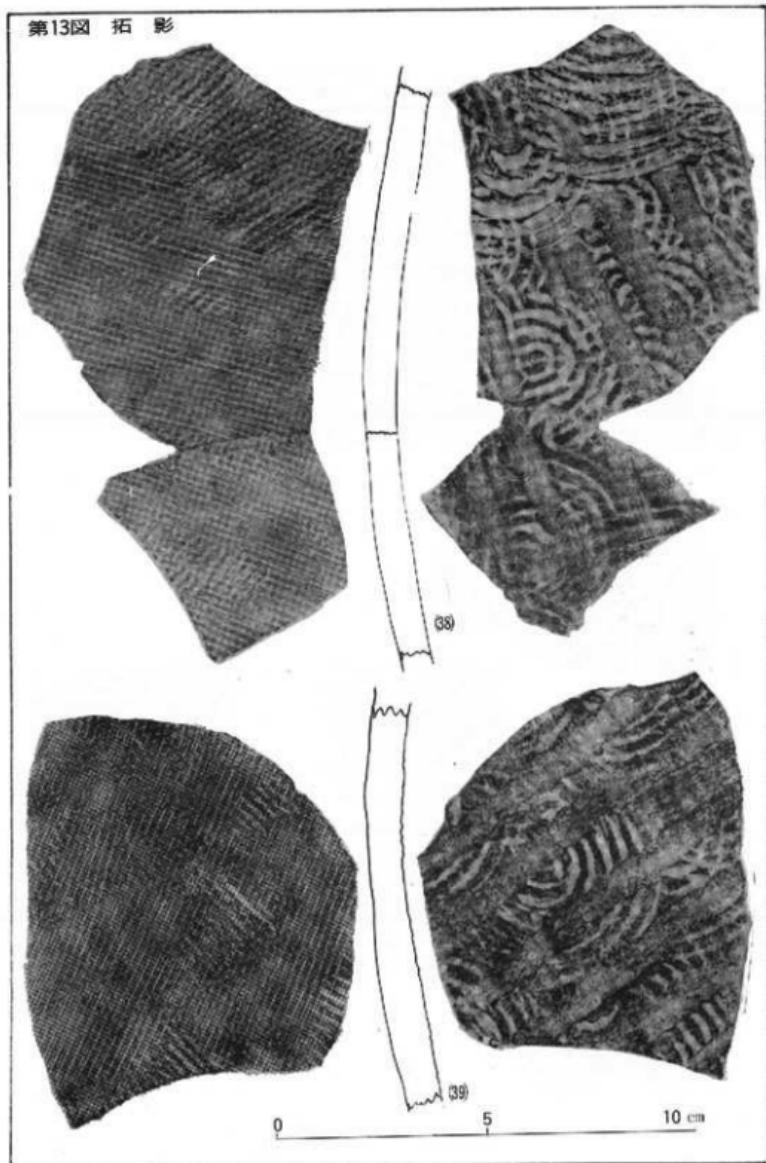


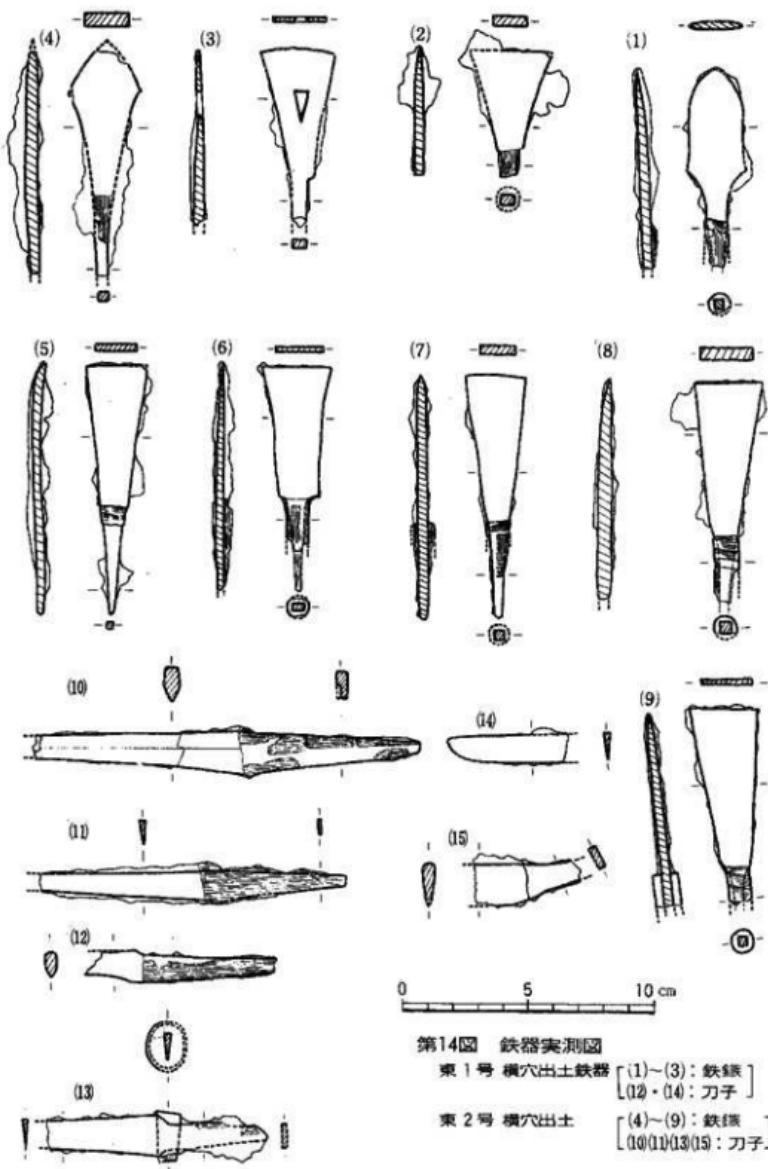
第11図 土師器(砥石を含む)実測図
[33, 34は東2号出土
他は東1号出土]



第12図 ヘラ記号(葉印) 及び塊片拓影

第13図 拓影

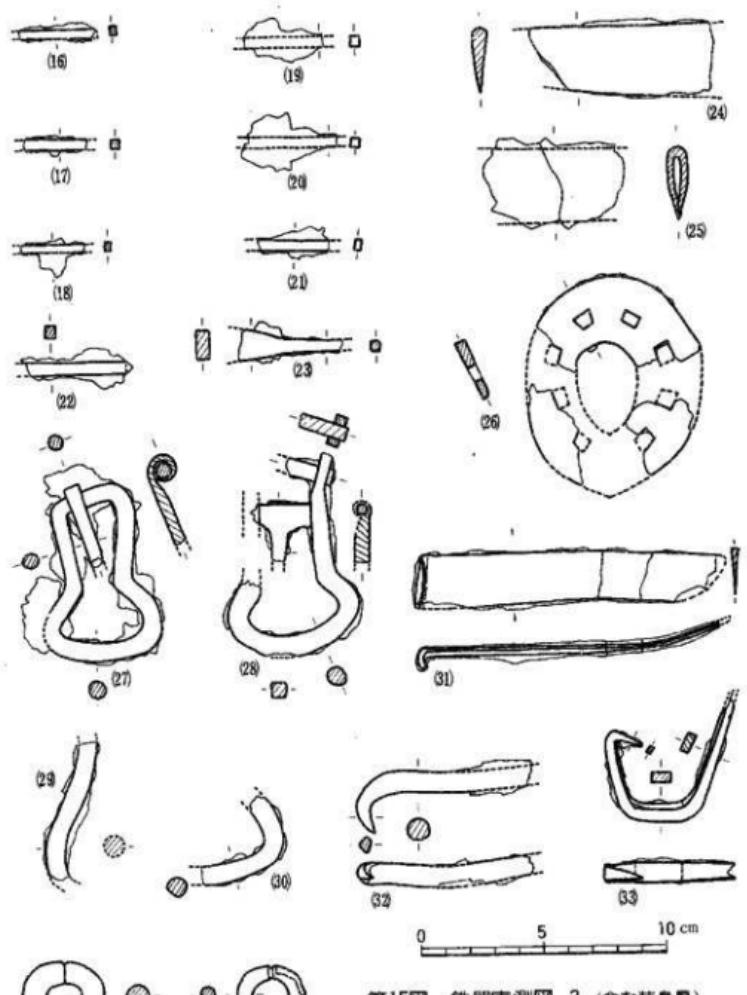




第14図 鉄器実測図

東1号 横穴出土鐵器 [(1)~(3): 鐵錠]
[(12)~(14): 刀子]

東2号 横穴出土
[(4)~(9): 鐵錠]
[(10)(11)(13)(15): 刀子]



第15図 鉄器実測図 2 (含む装身具)

東・秀横穴出土鉄器
 [(16)~(21) : 鉄綱基
 (25) : 大刀
 (29)・(30) : 馬具, (33)不明鉄器]





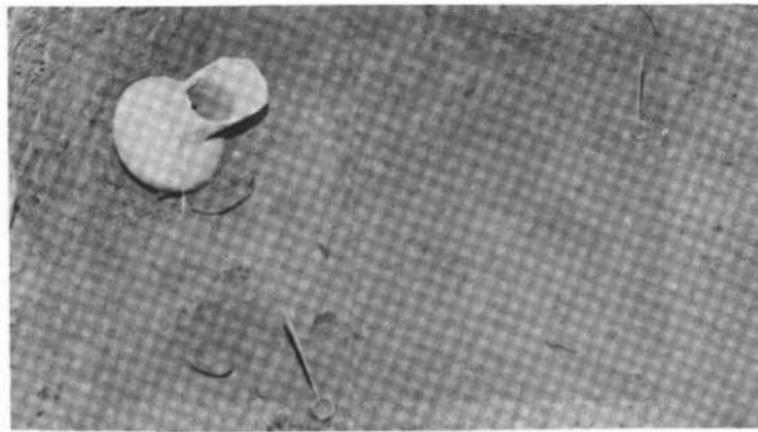
東1号



前庭部より後道を見る

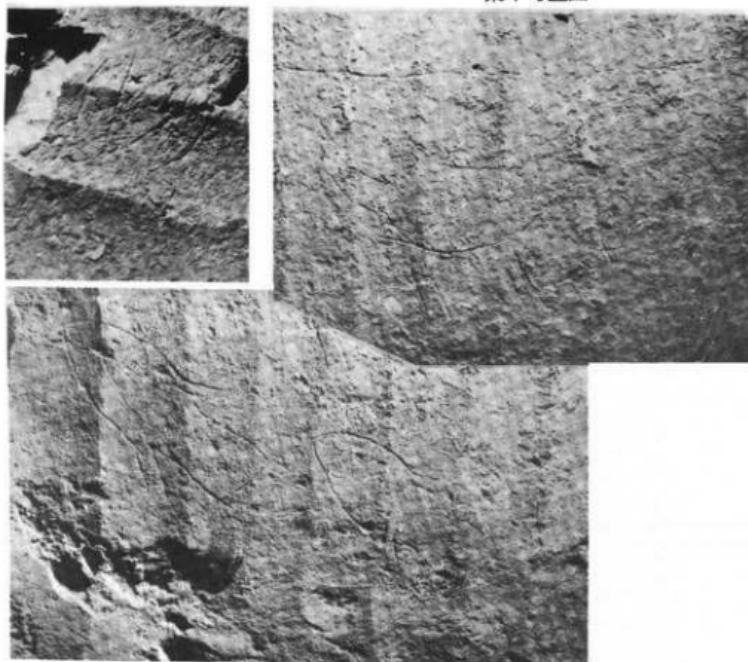


玄室より後道部石組を見る

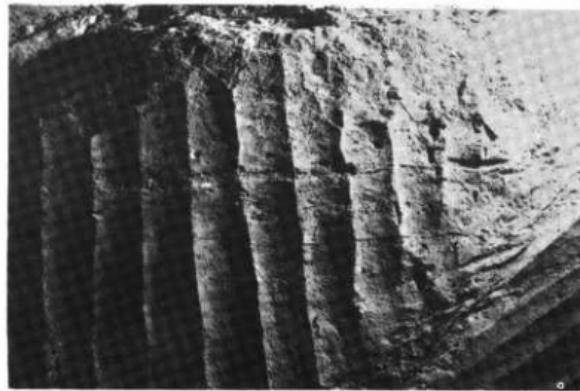


金環 出土状況

東1号壁画



馬・鳥の壁画（奥壁）

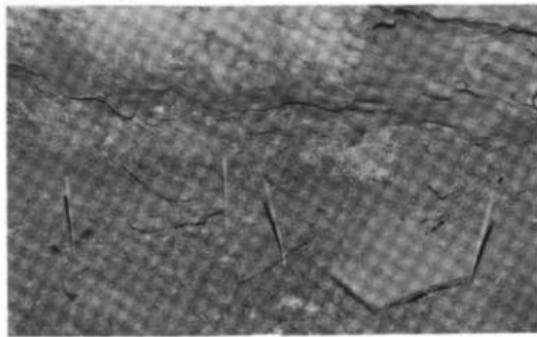


連続三角絞状線刻

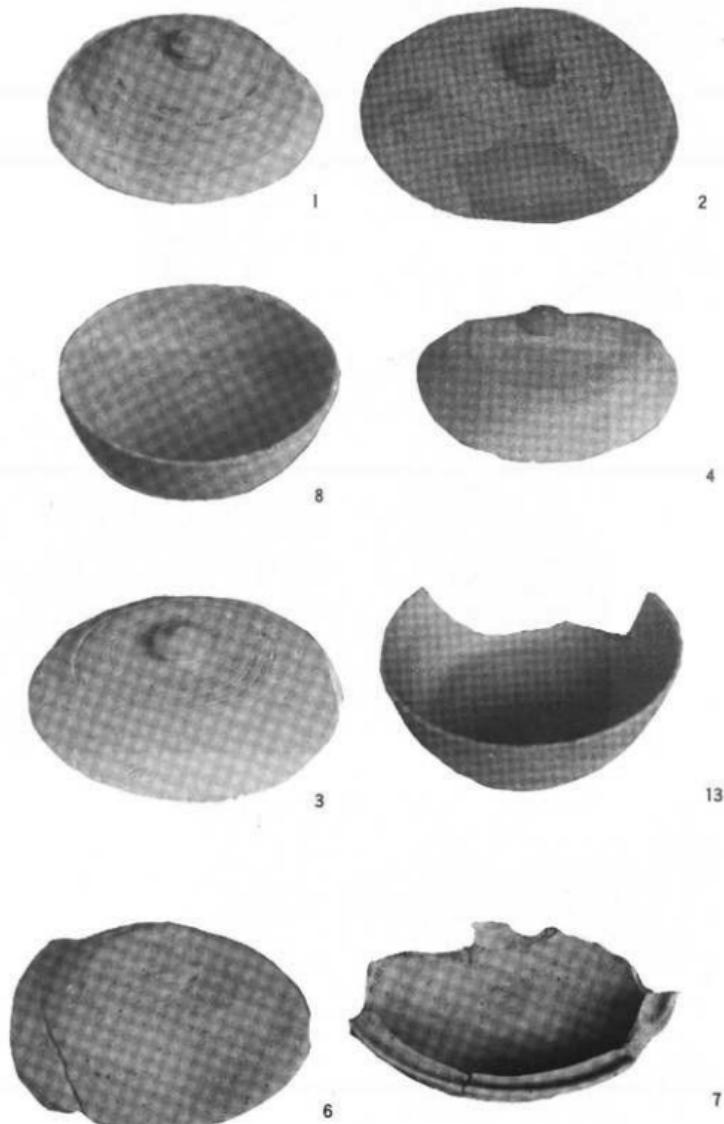


美道入口 石組

内 部 全 体



出 土 状 況



須惠器 (坏蓋・坏身)



9



11



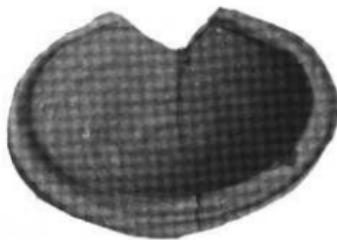
14



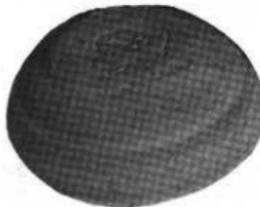
15



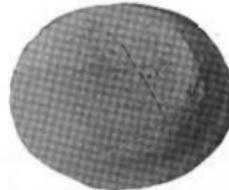
12



23

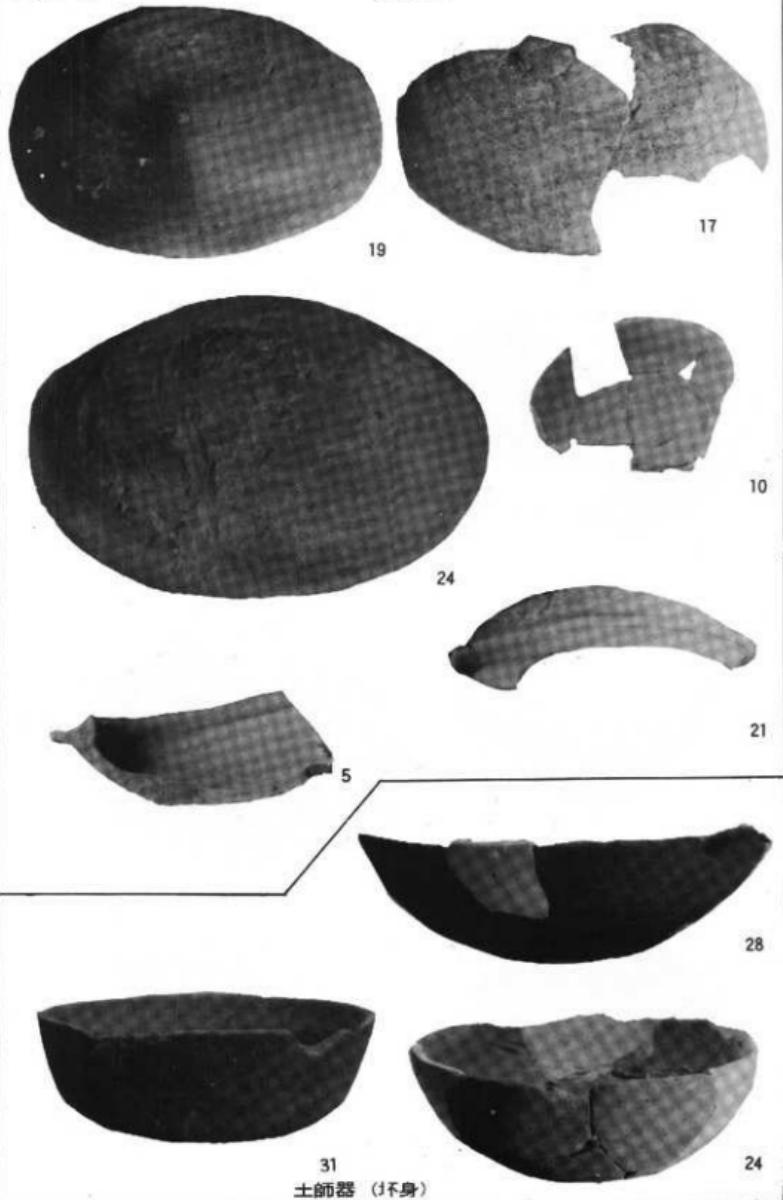


16



20

須 惠 器



土師器 (环身)

26
坛27
長颈甌

30 高 台



32



25



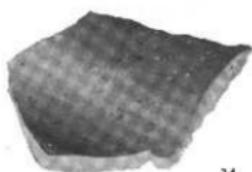
22



4



33 穿孔土器



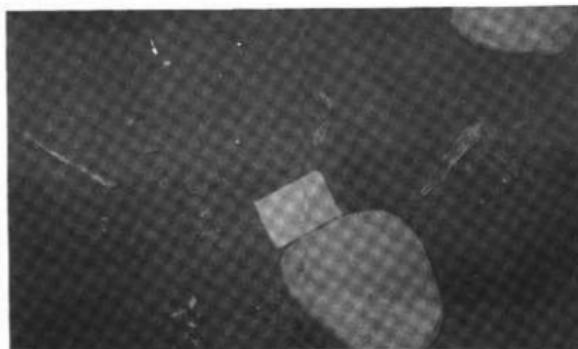
34



一括須窓片



40 坯石



人骨出土状況

圖版 10



1号 No. 6



1号 No. 7



2号 No. 19



1号 No. 1



1号 No. 2



1号 No. 3



1号 No. 4



1号 No. 5



2号 No. 17



1号 No. 1



1号 No. 2



1号 No. 3



1号 No. 4



1号 No. 8

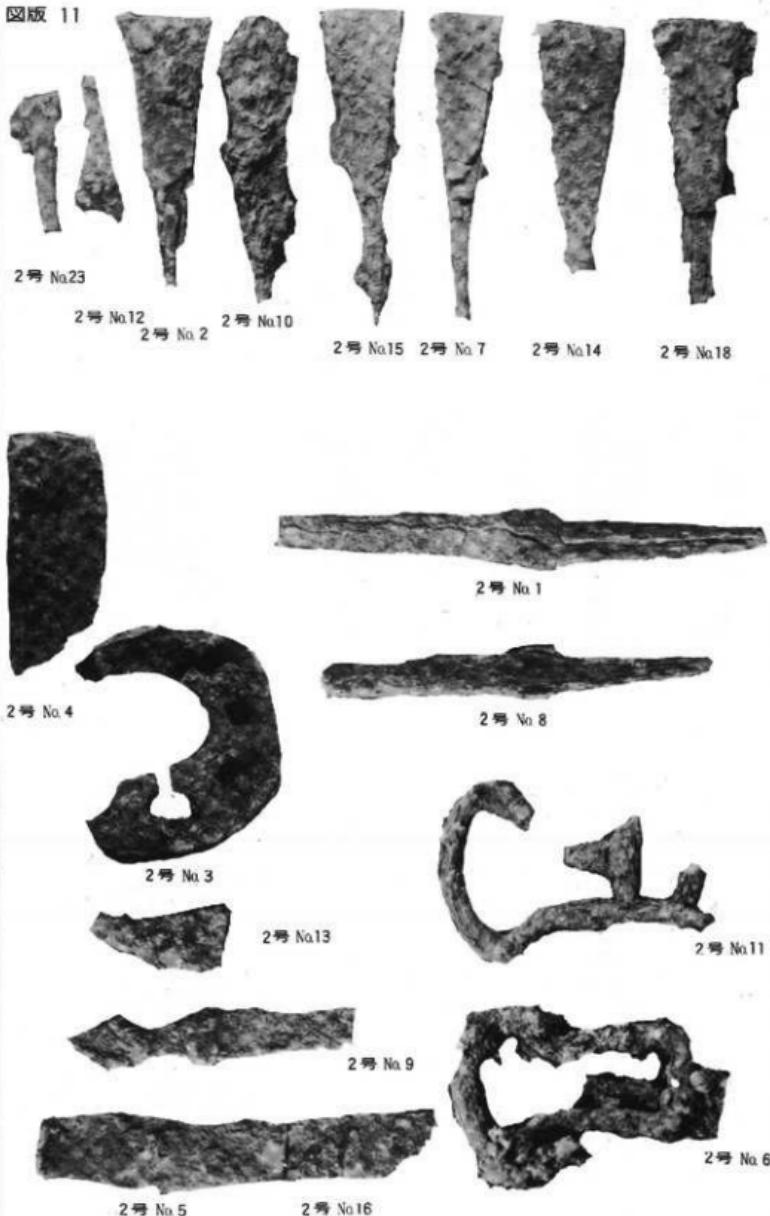


1号 No. 9



1号 No. 10

図版 11



一般国道10号佐土原バイパス埋蔵
文化財発掘調査報告書
(土器田横穴古墳)

昭和56年3月発刊

発行 佐土原町教育委員会
印刷 衛 池 田 印 刷
佐 土 原 町
TEL (4) 0130